



TITLE:

# 現代正義論における人格概念の役割 一視点の問題を手掛かりに一

AUTHOR(S):

若松, 良樹

---

CITATION:

若松, 良樹. 現代正義論における人格概念の役割 一視点の問題を手掛かりに一. 人文學報 1995, 76: 59-70

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48461>

RIGHT:

## 現代正義論における人格概念の役割

— 視点の問題を手掛かりに —

若 松 良 樹

- 1 はじめに
- 2 リベラルな人格概念をめぐる論争
- 3 人格概念に対する存在論的解釈
- 4 現代正義論における視点の問題
- 5 おわりに

### 1 はじめに

現代の正義論においては、様々な戦線で論争が展開されているが、リベラルな人格概念をめぐる攻防をその主戦場の一つとして挙げることが許されよう<sup>1)</sup>。具体的には、リベラルな人格概念はその抽象性の故に批判を受けている。このような批判の代表例は、共同体主義とフェミニズムによる批判である。興味深いことに、両者は、それぞれが提唱する具体的な人格のイメージに関しては大きく異なっているものの、リベラルな人格観の抽象性を批判し、具体的な自我の尊重を要求するという一点では収斂している<sup>2)</sup>。

確かに、リベラルな人格概念が抽象的であることは否定できない。そして、この人格概念が我々の自己理解と合致しないことも明白である。従って、この点においては、批判者に分があるように思われる。しかし、翻って考えるに、これほど明白な誤りをリベラリズムが犯しているということもおかしな話ではある。決してリベラリズムを過大評価するつもりはないが、リベラリズムにまつわるこの奇妙な感じは、正義論において人格概念が果たしている役割を再考することを促すものである。果たして、人格概念は本当の自我を描き出すことを目的としているのだろうか。それとも、何か他の目的をもっているのだろうか。本稿はこの問題に、以下の手順で取り組もうとするものである。

まず第一に、リベラルな人格概念に対する一般的な理解と、そのように理解された人格概念に対する批判とを簡単に整理する（第二節）。次いで、この論争においては、人格概念に対する存在論的な解釈が共通の前提とされていることを指摘し、更に、このような解釈に基づく論争が不毛なものであることを示す（第三節）。最後に、人格概念に対する我々の「視点」の重

要性を指摘し、現代のリベラリズムの代表的存在である J・ロールズの人格概念を、それがどのような視点から構成されたものかを検討することを通じて読み直す（第四節）。

## 2 リベラルな人格概念をめぐる論争

### (1) リベラルな人格概念

人間は多様な要素を有している。私の内部にも対立する諸要素が存在するが、私と彼との間にも重大な差異が存在する。世界に充満している差異に国家はどのように対応すべきなのだろうか。これこそが、現代のリベラリズムの問題関心であり、現代の正義論が取り組まなくてはならない課題の一つであろう。

この問題に対する一つの回答は、功利主義によって与えられた。功利主義は、人々が多様な存在であることを認めながらも、人々を比較し、整合的な社会的決定を導出するために、人生の成功に必ず付随すると思われる「幸福」「快樂」、あるいは各人が各人にとって良いと考えられる事態に対して当然もつと思われる「選好」に注目した。つまり、人々を直接比較することは困難なので、人々のもっている個人効用という属性に目を向け、この個人効用を最大化しようとしたのである。

功利主義は、従来の英米の知的伝統において広く受け入れられてきたが、現代のリベラリズムの特徴の一つは、功利主義に対する批判をバネに展開されてきたところにある。周知のように、功利主義には多数者の幸福の増大のためであれば、少数者を犠牲にすることも厭わないという側面がある。問題は、この功利主義の直観に反する側面の原因をどこに求め、どのような代替案を提出するかである。リベラリズムによる功利主義批判の最大のポイントは、この反直観的な側面を人格論のレベルで問題とし、功利主義が「人格の別個性や独自性という事実」を看過していると指摘する点にある<sup>3)</sup>。

すなわち、功利主義においては、「私」は個人効用という「私のもの」に還元され、「私」は、効用という「もの」の場所を示す言葉に過ぎなくなる。しかし、このように「私」が単なる効用の宿る場所に過ぎないのであれば、「私のもの」と「彼のもの」とをとりたてて区別する意味もなくなるだろう。というのも、「私のもの」であれ「彼のもの」であれ、「もの」であることには変わりがないからである。その結果、功利主義においては、個人効用という「もの」の最大化だけが目指されることとなる。このように「もの」に注目し、効用という経験の持ち主である「私」を無視するため、功利主義は、場合によっては、人々がそれぞれ別個の存在であるという事実を無視し、「私」を「彼」のために犠牲にすることさえ容認してしまうのである。要するに、リベラリズムによれば、功利主義があのように反直観的な結果をもたらすのは、人格を属性に還元してしまう点に原因があることになる。

このような功利主義の欠陥を克服するために、リベラリズムは、「私のもの」に還元されない「私」を探究する。具体的には、リベラリズムの人格観は「自我は目的に先行する」というテーゼにまとめることができよう<sup>4)</sup>。リベラリズムによれば、人格、すなわち「私」は目的や欲求といったその経験的属性、すなわち「私のもの」に還元されるものではなく、目的や欲求の持ち主として、経験的属性に先行する存在である。そして、人格は「選択」によってその目的と結びつくことになる。

## (2) リベラルな人格概念に対する批判

リベラリズムが提示した以上のような人格概念に対しては、様々な批判が投げ掛けられた。これらの批判は多岐にわたるが、ここではD・パーフィットの「更なる事実」説批判を中心に整理してみたい<sup>5)</sup>。パーフィットは、時点1における私と時点2における私が同一であると言えるのは何故かと問う。そして、彼はこの問いに対する回答として、時点1と時点2における私の心理的継続性または連結性を挙げる。すなわち、時点1の私と時点2の私との間の同一性を保証するものは、時点1における「私のもの1」と時点2における「私のもの2」との間の関係にしか存在しえない、と主張する。

このようなパーフィットの主張は、人格の同一性という哲学的な論点に関する主張としてだけでなく、正義論の観点からも興味深いものを含んでいる。というのも、彼は「私のもの」を越えた人格に関する更なる事実を捜し求めても無駄である、と批判しているからである。前節で確認したように、カント的なリベラリズムは経験の持ち主として、経験に還元されない「私」を探究しようとしており、パーフィットの批判は、このような企図に対する徹底的な批判となっているのである。

パーフィットの批判に呼応するかのように、「私」を強調するリベラルな人格概念に対して、「私のもの」を強調する立場からの様々な批判が寄せられた<sup>6)</sup>。確かに、我々は多様な属性をもった存在であり、生活者の実感として、リベラリズムの強調する抽象的な行為主体としての側面に還元されることには反感がある。従って、ある共同体主義者が行っているように、「私は誰かの息子か娘であり、別の誰かの従兄弟か叔父である。私はこのあるいはあの都市の市民であり、…」といった具合に、リベラリズムが看過した側面を列挙したくもなる<sup>7)</sup>。

更に、こうした側面が存在するというだけではなく、こうした側面こそが我々の人生に意味を与える重要な側面なのだと主張したくもなる<sup>8)</sup>、こうした側面をはぎ取られた末に残った抽象的な人格なるものだけが尊重されたからと言って、一体誰が喜ぶのか、と悪態をついたくもなる<sup>9)</sup>。また、抽象的であるということは、必ずしもリベラリズムが渴望してやまない中立性を保証するものではないことを、フェミニズムは示した。具体的には、ジェンダーという属性を無視して定義された道徳的人格なるものも、実は成人白人男性をモデルにしており、そ

れに適合しない女性に不利な結果をもたらすという点をフェミニズムは明らかにしたのであった<sup>10)</sup>。

要するに、属性を捨象し、属性から独立に、そして属性に先行して存在する人格の本質的特徴である「私」を見つけようとするリベラリズムの企図は、具体的な自我を尊重しようとする様々な立場から、「私のもの」こそが本質的な要素ではないのかという批判を突きつけられる結果となっているのである。

### 3 人格概念に対する存在論的解釈

#### (1) 存在論的解釈

もちろん、リベラリズムの擁護者も自我が具体的な属性に満ちた存在であることは承認するだろう。しかし、このような形式的承認が、批判者たちを満足させないこともまた明らかである。問題は、具体的な属性が重要であるとするなら、何故、具体的な属性を理論の中に反映させないのかという点にある。

この点の説明として、最も自然なのは、リベラリズムが捉えようとした「私」こそが、人格という対象にとって本質的なものであり、他の要素に優先するというものであろう。この説明を「存在論的」説明と呼ぶことにしたい。具体的には、この説明は、まず第一に、人格概念の役割を対象に内在する性質の記述として捉える。このように解釈された場合、人格のもつ性質は、対象に内在するものであるが故に、観察者の知識や立場には依存せずに存在することとなる。このような主張を「実在論」と呼ぶこととしよう。

人格概念に対する存在論的な解釈は、第二に「本質主義」とでも呼ぶべき特徴をもつ。すなわち、人格の性質の全てが重要であるわけではなく、一定の性質が本質的であるという主張である。従って、本質的とされた性質以外のものは無視しても構わないことになるだろう。要するに、存在論的解釈においては、人格概念が果たすべき役割は、人格という対象に内在している本質的特徴を捉えることとして理解されることになる<sup>11)</sup>。

このような存在論的解釈は極めて自然なものであり、また、リベラリズムの中に、存在論的解釈の痕跡を見出すことも困難ではない。前述したように、リベラルな人格論は、功利主義が「人格の別個性、独自性という事実」<sup>12)</sup>を無視していることを、その出発点としてきた。この一節は、リベラリズムが人格論の課題を、対象の記述と捉えていることを示唆しているように思われる。すなわち、人格論は対象である人格の「事実」を捉えることを目的としており、功利主義的な人格論は、この事実を捉え損なっている点で問題があるという主張として先の一節を解釈することができよう。このように解釈した場合には、リベラリズムは実在論の側面を有することになる。

更に、リベラリズムは本質主義の側面を有しているものとしても理解されうる。例えば、ロールズは「無知のヴェール」の想定によって、自我から道徳的人格以外の情報を排除していく<sup>13)</sup>。このような態度は、道徳的人格こそが人間の本質的特徴であり、それ以外の要素は無視しても構わないという本質主義の表明として理解されうるのである。

以上で確認したように、リベラリズムの人格概念の役割について、最も自然な解釈は存在論的なものであり、従来の論争もリベラリズムに対するこのような解釈に依拠しているように思われる。このような解釈がリベラリズムの解釈として適当であるかどうかは、次節で論じることとして、以下では、批判者たちがリベラリズムをこのように解釈した結果、自らも本質主義に陥っていることを示したいと思う。

## (2) 存在論的解釈の結末

このように存在論的に解釈されたリベラリズムに対しては、批判を加えることはそれほど困難ではない。というのも、リベラリズム版の本質主義を反証するためには、リベラリズムが本質的な要素としたもの以外に重要な要素が存在すると示せばよいからである。実際、リベラルな人格概念に対する批判の多くは、本質主義そのものは認めた上で、自我の本質的要素に関するリベラリズムの解釈に異論を唱えているように思われる。

確かに、リベラリズムの主張する抽象的人格以外に本質的要素が存在するというこれらの批判自体には説得力があるが、重大な欠陥も有しているように思われる。というのも、このような批判方法では、存在論的解釈が前提とされてしまうからである。結論から先に述べるならば、リベラルな人格概念に対する批判が以上のような前提に立って、本質主義そのものではなく、リベラルな本質主義に対する批判にとどまっている限り、共同体主義もフェミニズムもリベラリズムとは別の形の本質主義に陥ってしまうのである。

まず、共同体主義から見てみよう。共同体主義は、リベラリズムが擁護する抽象的人格を「負荷なき自我」とであると批判し、これが我々の自己理解に反すると主張する。そして、社会的役割によって「構成された自我」を提唱する<sup>14)</sup>。しかし、共同体主義がこのような自我の側面も存在するということにとどまらず、それこそが本質的な要素であると主張する時、フェミニズムの痛烈な批判を浴びることになる。何故なら、女性に対して伝統的に課されてきた役割を吟味しなおそうとするフェミニズムの立場からすると、これらの役割が押しつけられてきたという歴史的背景や権力関係を無視して、伝統的役割こそが女性の本質であると主張する共同体主義的な本質主義は、女性の経験を捉えきれないからである。従って、フェミニズムによれば、共同体主義が尊重しようとしているのは、具体的な自我ではなく、伝統的な家族の中での伝統的な具体的な自我であることになろう<sup>15)</sup>。

しかし、フェミニズム自体も決して本質主義の罠から逃れているわけではない。フェミニズ

ムは、男性中心的な視点が様々な社会实践の中に存在していることを指摘し、今まで抑圧されてきた女性の視点の重要性を強調している。しかし、フェミニズムが女性という属性を全ての女性に本質的なものとする時、フェミニズム版の本質主義に陥る。そして、女性という抽象的な言葉で全ての女性の視点を代表させようとする時、女性の間に存在している差異——例えば、人種、宗教、職業——は捨象され、女性の中でも発言力のある人達の視点を擁護し、少数派の女性の視点を抑圧していくことになる<sup>16)</sup>。

この事実は皮肉である。というのも、存在論的に解釈されたリベラリズムの人格概念が実際には一定の立脚点からのものであること（例えば、伝統、言語、文化、ジェンダー）を明らかにし、存在論的な主張に対して鋭い批判を浴びせかけてきたのは、他ならぬ共同体主義とフェミニズムだからである。共同体主義やフェミニズム自体が、自らの存在論批判を忘れ、共同体主義版やフェミニズム版の本質主義に陥った場合には、少数派の視点を抑圧してしまうのである。

以上の論述は、「実体化された普遍が個別的なものに暴力をふるう」というよく知られた事実の確認に過ぎないのかもしれない。しかし、共同体主義やフェミニズムがいかに容易に「自分が戦おうとした古い想定を新しい文脈で繰り返してしまう」<sup>17)</sup>かは銘記されるべき教訓である。以上の論述から明らかなように、問題の源泉はリベラリズムに特有なものではない。リベラリズムであれ、共同体主義であれ、そして誰よりもこの問題に敏感であったはずのフェミニズムであれ、本質主義的に解釈された場合には同じ過ちを犯すのである。

功利主義は人格の別個性、独自性を看過し、リベラリズムは具体的な自我を捨象し、共同体主義は社会的、伝統的役割に人間を還元し、フェミニズムは女性の経験の内部での多様性を軽視し、…。果たして、このような形で論争を続けていくことには一体どのような意味があるのだろうか。常に少数者の視点を抑圧しながら進められる本質探しのゲームはそろそろやめなくてはならない。

#### 4 現代正義論における視点の問題

##### (1) 視点の問題

本質探しのゲームに興じていたのは、正義論だけではない。というのも、存在論的解釈は正義論における人格概念だけでなく、あらゆる対象に関して自然な解釈だからである。しかし、今世紀に入ると、多くの領域で、この存在論的思考への批判が噴出した。それらの中でも、注目に値するのは、「観察」という行為自体への哲学的反省が深まり、観察者はもはや透明な目とはみなされず、観察者の「視点」が観察に対して強い影響を与えることが明らかにされていったことである<sup>18)</sup>。

このような観察者の視点の重視は、現代正義論における本質主義的傾向に対する重大な挑戦でもある。正義論においては、人格論の対象である人格の特徴は、対象に内在しているものとして捉えられてきた。従って、この特徴は対象に内在的であるが故に、観察者の視点の問題が自覚的に問われることは少なかったように思われる。

しかし、我々は多様な要素をもった存在であり、その要素の全てを捉えることはできない。我々は一定の視点から、一定の要素に関連のあるもの、重要なものとして抽出し、他の要素を関連のないもの、些細なものとして捨象しているのである。この我々の視点をぬきにして、あたかも一定の要素がいつでも重要であるかのように扱うことは、無意味であるどころか、前節で確認したように、有害でさえある。というのも、いかなる要素を強調するにせよ、一定の要素を排除しているのであり、本質主義は、この排除を隠蔽する力をもつからである。

また、自我がこのような多様な要素からなるが故に、ある要素が自我の要素となるかどうか、すなわち、ある要素が自我の境界線内に入るかどうか、自我に対する視点によって決せられることになる。従って、自我の境界も予め存在しているのではなく、ある視点から一定の要素を中心的なものとし、他の要素を周辺的なものとすることによって、構成されていくような性質のものである<sup>19)</sup>。

以上のような自我のイメージによれば、人格概念の役割は、予め存在する人格という対象に内在する特質の内、本質的なものを「記述」することではなく、一定の視点から、人格を「構成」していくことである。このような理解を前提とするならば、正義論において人格概念を用いたり、それを批判したりする場合には、本質主義に陥らないように、それが何の目的で導入されたのか、いかなる視点から用いられているのか、といったことを明確にすることが求められる。

## (2) 人格に対する「政治的」視点

以上のような問題文脈から、近年のロールズを読み直してみたい。近年のロールズは、各人の目的は多様であり、理性的な人々の間でも意見の一致は見られないという問題認識から自分が出発していることを強調している。その結果、可能な限り各人の形而上学的信念に依拠しないような理論を構築しようとする。

このような問題関心から、彼はリベラリズムを「政治的」リベラリズムと「包括的」リベラリズムとに区分した上で、自らの理論を政治的リベラリズムと位置づけている。政治的リベラリズムは、第一に、その主題が社会の基本構造であり、この点で人生全般の価値を扱う包括的リベラリズムと区分される。第二に、その提示方法に関して、政治的リベラリズムは、包括的な学説の一部ではあるものの、そのような広範な背景に言及することなく提示されるという特徴を有している。第三に、政治的リベラリズムの内容は、民主主義社会の公的な政治文化に



潜在している基本理念によって表現される<sup>20)</sup>。

このような意味での政治的リベラリズムに依拠するロールズは、人格に関しても、一般的、包括的な形而上学的な議論を展開しようとはしない。あくまで、彼は自分の人格概念が「政治的」な視点からの人格についての捉え方であることを強調している<sup>21)</sup>。

それでは、具体的には、人格に対してどのような視点をロールズはとるのだろうか。彼の正義論である公正としての正義は「社会を時を越えた世代間の社会的協働の公正なシステムとしてみなすべきであるという考え」から出発するので、この考えに適合するような人格観が採用される。具体的には、人格は市民としてみなされる。ギリシャ以来、人格は社会生活に参加できる存在として理解されてきた。この理解に基づいて、公正としての正義においても、市民は、生涯にわたって、社会の通常の、そして完全な協働的メンバーとして把握される。更に、公正としての正義は民主主義の伝統にも依拠している。そしてこの伝統は、市民を自由かつ平等な人格として考えている。このことを反映して、ロールズの人格概念も、自由かつ平等な市民という内容が与えられることになる<sup>22)</sup>。

更に、彼の人格概念は、人格という対象の記述を目指すものでもない。彼は、本稿で存在論的解釈と呼んだものに類似した立場である「合理的直覚主義」と彼自身の立場である「政治的構成主義」とを対比している。その中で、彼は合理的直覚主義が「理論理性」に依拠して、正義原理の定式化を価値という所与の対象についての知識の問題として捉えるのに対して、政治的構成主義は主として「実践理性」に依拠して、対象についてのある考え方に基づいて対象を作り上げることに関わる問題として把握するという違いがある、と主張している<sup>23)</sup>。このことから、ロールズが自分の人格概念に与えている役割が、真の自我を描き出すのではなく、政治的「視点」からの人格の「構成」であることが見て取れるだろう。

このような人格についての説明においても、当然、人間のもつ一定の特徴は無視される。しかし、その理由は、この特徴が本質的ではないということには求められず、公正としての正義の視点からはそれらが関連をもたないという説明がなされることになる。従って、他の視点からは、これらの特徴が重要性をもちうることは当然、承認されている。実際、ロールズは、人格に対して様々な視点が存在しうることを強調している。「様々な文脈において、我々は我々の人格に対して、矛盾せずに多様な視点をとることができ」<sup>24)</sup>、「世界や世界との自分の関係の様々な側面は、他の視点からは異なった仕方で見られるかもしれない」<sup>25)</sup>。

### (3) 人格と目的

前述したように、ある要素が人格の範囲内に入れられるかどうかは、人格に対してどのような視点をとるかによって決められる。ある視点からは人格の中枢に据えられる要素が、他の視点からは人格の周辺、場合によっては領野外に位置づけられることもありうる。このように視

点によって、位置づけが異なる要素として、各人がもっている目的を検討してみよう。

パーフィットは、ある人の目的ないしは信仰が大きく変わってしまった場合、この人は最早、昔の彼女と同一人物とは言えないのではないかという問題を提出した<sup>26)</sup>。この問題に対してロールズは、人格の同一性を公的、または制度的同一性と道徳的、または非制度的同一性とに区分することによって答えようとする<sup>27)</sup>。市民も通常、目的やコミットメントを有している<sup>28)</sup>。そして、B・ウィリアムズが主張するように、このコミットメントが人生において重要な役割を果たしていることも否定できない<sup>29)</sup>。従って、このコミットメントが劇的に変化してしまった場合、道徳的同一性の視点からは、彼女は最早同一の人物ではない、とロールズも認める<sup>30)</sup>。従って、この場合、彼女の道徳的同一性は失われたと言えよう。

しかし、このような場合でも、彼女の公的な同一性は失われていない。というのも、彼女は依然として同一の基本的権利や義務を有しているからである。ロールズが前提とする現代民主主義社会においては、基本的権利や義務は、その所有者の目的やコミットメントの内容とは無関係に、市民であるが故に与えられるものであり、目的が変わったからと言って、変更を受けようとする性質のものではない<sup>31)</sup>。

要するに、人格に対する視点が異なれば、目的の変更という同一の出来事が人格に対してもつ影響も異なった仕方で評価されることになる。パーフィットの言うように、属性や特徴を越えた「彼女」という更なる事実が存在せず、「彼女のもの」だけが人格の同一性にとって重要であるとしよう。しかし、この「彼女のもの」の内容は、我々が人格に対してどのような視点をとるのかによって変わる。すなわち、非制度的な視点からは、目的やコミットメントが「彼女のもの」として重視される。従って、先の場合においては、「彼女のもの」の継続性・連結性が欠如しているために、昔の彼女と今の彼女との間には道徳的同一性は存在しないことになる。しかし、制度的な視点からは、「彼女のもの」として重視されるのは、目的やコミットメントではなく、自由かつ平等な市民がもっている能力であり、基本的な権利や義務である。そして、先の事例においても、このようにして同定される「彼女のもの」に変化がない以上、彼女の公的同一性は維持されている、とロールズは主張するのである。

以上で確認できたように、近年のロールズは、自分が依拠している視点を明示することによって、彼の道徳的人格が形而上学的なテーゼとして提出されたものではなく、一定の視点から人格についての像を描きだそうとするものであることを強調している。従って、ロールズにおける人格概念は、人格をありのままに記述するという役割は担わされてはならず、むしろ、公的な視点から人格を構成しようとするものである。

## 5 おわりに

近代的な思考が視点を前提としない view from nowhere<sup>32)</sup>であることを批判したのは、共同体主義とフェミニズムであった。共同体主義は、我々がものを見る場合には共同体・言語・伝統が媒介となっているということを指摘した。また、フェミニズムは共同体だけではなく、観察者のジェンダーが観察に必然的な影響を与えることを明らかにした。要するに、両者は view from nowhere の装いを与えられた近代的な思考が実際には view from now and here でしかありえないことを暴露したのだった<sup>33)</sup>。

しかし、view from nowhere の呪縛は厳しく、これを批判したはずの共同体主義やフェミニズムも自らの立場を view from nowhere という形で表現してしまった。その原因は、我々が客観性への憧れを有していることに求められよう。我々が何かを主張する時、客観的な装いを自分の主張に与えたいと思う。そして、そのための伝統的な方法は、神の視点から自分の主張が客観的に真であると示すことである。これが view from nowhere の批判者が同じ穴にいつも簡単に滑り落ちてしまう原因なのである。

本稿は、この傾向に対して、視点を明示する必要を強調し、従来、存在論的に解釈された上で批判を浴びてきたロールズに存在論的解釈からの転換の萌芽が見て取れることを示そうとした。ただし、人格とは観察者が一定の視点から構成していくものであるということを認めるだけで問題が解決するとは思われない。また、自分の依拠する視点を明示するだけでは、少数派の視点を考慮したことにはならないし、ましてや誰かを排除しないことにもならない。従って、ロールズの場合も、このままでは具体的な属性に彩られた少数派を正当に扱っていないという批判に答えたことにはならないだろう。しかし、それでも、私は視点を明示すべきであると思う。というのは、存在論的解釈に依拠した場合には、一定の属性を排除した理由は見えなくなり、他の視点からの検討が抑圧されるのに対して、視点の明示は、自分の主張の限界を示し、他の視点からの検討を促すものだからである。

- 1) この論争が成立するためには、リベラリズムが共通の人格概念に依拠していなくてはならない。

私見では、リベラリズムの中でも多くの理論は人格概念を前提としており、しかも、この人格概念には一定の類似性が存在する。J・ロールズとA・ゲワースの人格概念については、参照、拙稿「人権の基礎としての主体性についての一考察（一）」『法学論叢』121巻6号（1987年9月）22-47頁、「人権の基礎としての主体性についての一考察（二）・完」京都大学法学会編『法学論叢』123巻2号（1988年5月）89-111頁。また、R・ドゥワオーキンの人格概念については、長谷川晃「平等・人格・リベラリズム」『思想』775号（1989年1月）53-81頁。なお、以下では、リベラルな人格概念として、ロールズによって提出された道徳的人格を念頭に置いて論を進めることにしたい。

ただし、そもそもリベラリズムは一定の人格概念を前提とする必要があるのかに関しては争いがある。Cf. Allen E. Buchanan, "Assessing the Communitarian Critique of Liberalism", *Ethics*, 99(1989), pp.853-4. しかし、私はブキャナンの「政治的テーゼ」においても、実際には人格概念が一定の役割を果たしており、またこのことは不可避的であると思う。更に、人格概念を使用しないことによって、後述するような「視点の問題」に関心になってしまうおそれもある。

- 2) Rainer Forst, "How (not) to Speak about Identity", *Phi. & Soc. Crit.*, 18(1992)293.
- 3) John Rawls, *A Theory of Justice* (Harvard University Press, 1971), 29.
- 4) *Ibid.*, 560.
- 5) Derek Parfit, *Reasons and Persons* (Oxford University Press, 1984) なお、パーフィットの理論は、主として人格の同一性に関するものであり、直接的には正義論における人格概念に関わるものではないが、正義論にとっても無視できない含意を有している。Cf. Michael A. Mosher, "Boundary Revisions", *Pol. Stu.*, 39(1991). また、参照、森村進『権利と人格』（創文社、1989年）、第一部、第五章。
- 6) この論争の詳細については、cf. Mosher, *ibid.*
- 7) Alasdair MacIntyre, *After Virtue*, 2nd ed. (Duckworth, 1985), 220, 篠崎栄訳『美德なき時代』（みすず書房、1993年）270頁。
- 8) Bernard Williams, "Persons, Character and Morality", in his *Moral Luck* (Cambridge University Press, 1981), 12-4.
- 9) Robert Nozick, *Anarchy, State and Utopia* (Basic Books, 1974), 228, 嶋津格訳『アナキー・国家・ユートピア（下）』（木鐸社、1989年）377頁。
- 10) Catharine MacKinnon, *Feminism Unmodified* (Harvard University Press, 1987), 37.
- 11) 存在論的解釈の特徴に関して、筆者が参考にしたのは、Cf. Martha Minow, *Making All the Difference* (Cornell University Press, 1990), ch.2. また、参照、大庭健『はじめての分析哲学』（産業図書、1990年）。
- 12) Rawls, *A Theory of Justice*, 29. なお、強調は筆者による。
- 13) Rawls, "Kantian Constructivism in Moral Theory," *J. of Phi.* 77(1980), 528-9.
- 14) Michael Sandel, *Liberalism and the Limits of Justice* (Cambridge University Press, 1984), 172-3, 菊池理夫訳『自由主義と正義の限界』（三嶺書房、1993年）280-1頁。
- 15) Susan Moller Okin, *Justice, Gender, and the Family* (Basic Books, 1989), 41-62.
- 16) Anne Phillip, "Dealing with Difference", *Constellations*, 1 (1994) 75, Minow, *ibid.*, 229-31.
- 17) Minow, *ibid.*, 229
- 18) 例えば、「相対性理論」や「不確定性原理」は観察者と観察対象との関係に注目する必要があることを明らかにした。現象学は「生活世界」の発見によって、観察者が無媒介的に観察しているのではなく、文化や伝統や言語といった道具を媒介にしないで観察できないことを明らかにした。科学哲学においても、「観察の理論負荷性」「パラダイム論」といった議論は、観察が決して理論から独立した行為ではないことを示した。これらの思想動向は共同体主義やフェミニズムが台頭してくる背景ともなっている。Cf. Minow, *ibid.*, ch. 7.
- 19) Mehr Dan-Cohen, "Responsibility and the Boundaries of the Self", *Harvard L. Rev.*, 105 (1992) 965.

- 20) Rawls, *Political Liberalism* (Columbia University Press, 1993), 11-5.
- 21) *Ibid.*, 29-35.
- 22) *Ibid.*, 18-9.
- 23) Cf. *ibid.*, 90-94. ただし、彼の「政治的」構成主義の構想は、いかなる包括的学説とも両立させることを目指しているので、政治的構成主義が合理的直覚主義を否定するわけでも、擁護するわけでもないと限定を付していることにも留意されたい。Cf. *ibid.*, 95.
- 24) Rawls, "Kantian Constructivism in Moral Theory," 545.
- 25) Rawls, *Political Liberalism*, 15-6.
- 26) Parfit, *ibid.*, §110
- 27) Rawls, *ibid.*, 30.
- 28) *Ibid.*, 19
- 29) Williams, *ibid.*
- 30) Rawls, *ibid.*, 31.
- 31) *Ibid.*, 30.
- 32) Thomas Nagel, *The View from Nowhere* (Oxford University Press, 1986).
- 33) このことは、人格概念が恣意的で、主観的なものであるということ意味するものではない。一定の視点、立場に立つならば、一定の概念が客観的に真であることも可能である。Cf. Amartya Sen, "Positional Objectivity", *Phi. & Pub. Aff.*, 22 (1993) 126.

＜後記＞本論文は、1994年度文部省科学研究費総合研究(A)「応用倫理学の新たな展開」による研究成果の一部である。